

資料渉猟余話

その106

ちょっと語呂が悪
いが、標題のとおり、
尾林焼篆刻陶器草創
期、東京からきた大
橋浩堂(明治末来飯
大正4年47歳で没、
本名片江萬太郎)と
いう篆刻家が出て、
滞在わずから5年足ら
ずであるが精力的な
活動をして飯田下伊
那の陶芸に大きな影
響を与え、花火のよ
うに消えていった。
その消えかけた足取
りを訪ねていると、

捨てられそうになっ
たゴミ袋の中から、
ついに彼の残した多
量600枚を超える
印箋や押印したハガ
キが出てきた。

浩堂印譜の大量発見

嶋 不 濁

重復もかなりありそ
うだが、印箋に押し
られた「於南信天龍峽
窟 浩堂鑄」や義弟
窟 浩堂鑄」や義弟
に完成を告げるハガ
キで、義弟にあたる
東京赤坂の印判屋を
通じて販売していた

になる。ここに来て
簡単に焼却していい
ものではない。印箋
に記された多少知ら
れた名前を列挙すれ
ば以下のようにあ
る。 小室翠雲・鏑木清
方・福井江亭・大西
南山・八木岡春山・
大正4年に自死した篆刻家
山田敬中・鳥山幡山
・池上秀敏・荒木寛
村強輔(昇堂)・孫
民・福田眉山・若柳
(雅臣)たちが10
0年以上にもわたっ
て保存していたこと
・黒崎修齋・尾竹竹

坡・奥村藻山・青柳 寛友・鶴田幾水・移
溪幹・工藤観古・五 川浩哉・生田是文・
島耕畝・筆谷等観・ 犬塚晃峻・工藤観古
森広陵・椎塚蕉華・ 保間素堂・長安雅
石田吟松・山本暎邦 山・篠原晩香・菊地
・内藤晴洲・澤山寛 華秋・柴田耕洋・鈴
民(對櫻居)・荒木 木秀芳・池田輝方・

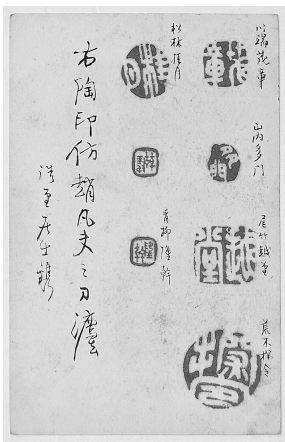
山本昇雲・内藤晴洲
・中村古鏡・鈴木啓
處・井澤猷水・森作
湖仙・小山雪耕・高
橋藹山・中島光村・
山口桃齋・野原素
門、他

南信尾林の陶芸産
業と伊那の漢学や国
学の素養、茶道や作
庭、骨董趣味の集合
昇華した文化として
の篆刻陶器が明治末
から大正にかけて天
龍峽を中心として花
開いた。600枚を
超える印箋は、その
証左である。

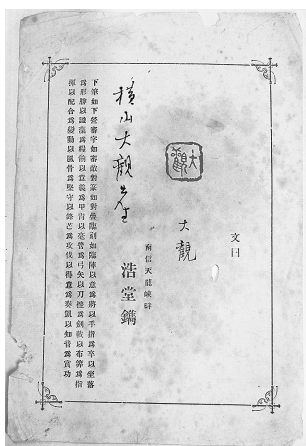
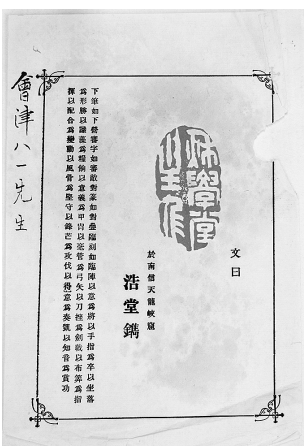
生き馬の目を抜く
かのごとき経済性の
スケールしかもたな
くなった現代社会の
中で、生きる自信と
誇りを自信を取り戻
す縁になる資料であ
ったと思っている中
と、来り者の小生
山間地の人々が、自
身の足元を再検証す
ることが、もう一度



荒木十畝 畫伯 嘯
浩堂居士 羨刀



ハガキ



印箋